

著書紹介

著者自らが新刊を紹介します。



メディア・リミックス デジタル文化の(いま)を解きほぐす

創造表現学部・准教授・阿部 卓也／
創造表現学部・准教授・松井 広志(分担執筆)

▶A5判 ▶296ページ ▶ミネルヴァ書房

▶本体2,800円＋税 ▶2023年11月20日発行

▶「メディア・リミックス」を鍵概念として、メディアの混交とデジタル文化の変容について考察した論文集。映像、広告、ライブイベント、テーマパークなど、さまざまな対象が取り上げられている。阿部はブックデザインとDTPの章、松井はゲームと自作文化に関する章を執筆。



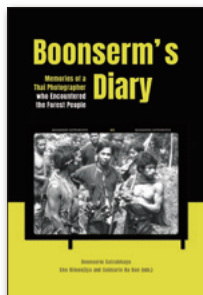
教員養成課程・保育士養成課程のための うたうソルフェージュ

福祉貢献学部・教授・松下 伸也(共編著)

▶B5判 ▶75ページ ▶圭文社

▶本体1,500円＋税 ▶2024年3月1日発行

▶「子どもにうたい聴かせることができる」教員保育士の育成に主眼をおき視聴、楽典、リズム、和声を横断的に学習し、基礎的なソルフェージュ力を養うための1冊。歌う導入としてストレッチや発声についても取り上げている。第2章6を分担執筆。



Boonserm's Diary Memories of a Thai Photographer who Encountered the Forest People

交流文化学部・准教授・二文字屋 脩(共編著)

▶A5判 ▶124ページ

▶RCSD (Chiang Mai University) ▶2024年3月発行

▶1960年代前半、タイ北部。森の民ムラブリの調査に参加した地元紙の記者ブンスーム・サトラバヤーは、その体験を元に執筆した記事で「タイ版ピューリツァー賞」と称される賞を獲得。本書は、2017年にこの世を去った彼から託された当時の日記を、日泰のムラブリ研究者が英訳(解説付き)したものである。



東南アジアで学ぶ文化人類学

交流文化学部・准教授・二文字屋 脩(共編著)

▶A5判 ▶320ページ ▶昭和堂

▶本体2,600円＋税 ▶2024年3月25日発行

▶ユニークな文化が多様かつ複雑に交差する東南アジア。ひとつの国でも、多様な言語・宗教・習慣をもつ人々が暮らしている。いわば文化人類学にとって研究対象の宝庫。その地でフィールドワークを積み重ねる研究者たちが誘う、文化人類学の入門書。私たちの当たり前を疑う文化人類学の目を通して東南アジア社会を学び、読者とともに「人間とは何か」を問うていく。